

# 辰鳩丸の最後と

## 乗組員の受難記

小松 勝利

昭和二十年元日を目前にした十九年十二月三十日夜、巡洋艦香椎以下護衛艦十隻に護られたタンカー数隻を含む十隻の輸送船団は、昭南港（シンガポール）を密かに出港し日本本土に向かった。その中に辰鳩丸（戦標船K型三島型五、三九六総トン）も加わっていた。本船は、生ゴム、錫その他戦時物資を満載し、上甲板にはイギリス、オランダの捕虜約五百名と、十数名の陸軍警備兵を載せ、乗組員は十数名の海軍警戒隊を合わせ、七十名余とまさに超満船であった。

明けて三十一日、マレー半島に沿い可航水深ギリギリに二列縦隊で接航北上し、その後および沖合を優速を利用して護衛艦が獵犬のように走り回り、香椎の艦載水上偵察機が上空より警戒して、これまでの航海で受けた護衛ぶりに比べ、今航の護衛は軍当局が全力を結集しているかにみえた。さらに夜間は早々に適当な泊地に仮泊し、見張りの容易な日中のみの航海という慎重さは、潜水艦に対して万全と思われ心強く感じられた。護衛艦不足の当時、この強力な護衛ぶりから推して、船団が積載している貴重物資は是非とも本土に到達させたいものばかりであった。

臨戦態勢下で迎えた元旦は、おとそや特別な料理もなく、北の空に向かって皇居遙拝と万歳の三唱で祝賀式は終わった。道上二航士と私は航海当直（危険海域はダブルワッチで航海、見張り、信号の責任者を分担

し、船長は常時船橋で総指揮をとる。昭南出港以来、特攻隊の鉢巻こそ締めないが、乗組員全員悲壮な気持を抱き、祖国のために全力を尽くす決意の航海であった。

米機動部隊の大群が南支那海比島海域に接近中との情報が伝えられ、浅井一航士より急遽捕虜を使って船橋、見張所、機銃陣地などに土嚢を築くよう指令され、土砂がないので燃料炭を入れた袋を一重では不充分と、二重列として約一メートル余の高さに築いた。労務提供の捕虜には、炊飯時に生じたコゲご飯で雑炊を作り、特配した。元旦の特別食にありついたのは彼等のみであった。

一月四日仏印（ベトナム）サイゴン港着、全捕虜と陸軍警備兵を下船させ、補給を終えて五日、サイゴンを出港した。束の間の上陸で味わった平和なフランス風の市街や買物が話題になったが、マレー半島北部より連日索敵接触する米大型偵察機の出現に、再び重苦しい雰囲気の臨戦態勢に戻り、仏印沿岸を北上、本土に向け急いだ。しかし八ノット船団速力と、頻繁に行う之字運動のため、航程は遅々として進まない。カムラン湾を経て、十一日夜、仏印中部キオン湾に仮泊し、翌十二日七時過ぎ漸次抜錨、二列縦隊に隊列を整え航行開始、外側に位置した辰鳩丸は、沖側の右舷に見張りの重点を置き、私も右舷ウイングで見張り中、わが偵察機が、突如予定の行動を途中で止め反転した。不審に思いその方角に双眼鏡を向けるとレンズの中に黒点が二つ、みるみるうちに拡大され、ズングリした型はまさに米機動部隊艦載戦闘機中の最新鋭グラマンであった。直ちに旗艦香椎宛「右前方敵機発見」の信号を掲げかつ「戦闘配置に付け」のブザーを鳴らす。ちょうど午前八時四十五分。グラマンより火箭が光り、偵察機はダイビングをするように海面へ突込んだ。その間わずかに数秒。辰鳩丸に初めて三航士として乗船以来、最も

長く感じられた一日がそれから始まったのである。

続々飛来する戦闘機、急降下爆撃機の大群に向かってわが船団の全火砲が火を吹き、上空は炸裂する砲弾、赤く火の糸を引く機銃弾、全艦船が速力一杯とした煙突の煙に、早くも被弾した僚船の巨大な炎と黒煙がさらに加わり、南海の澄み渡った空や明るく輝く陽光もまたたく間に薄暗くなった。見張員は百機を超える敵の機数や種別を報告する余裕もなく「急降下右〇〇度突込んでくる」と絶叫するのみ。敵戦闘機は近距離の海域より飛来するのか、それぞれ小型爆弾を二個ぐらい抱いて、急降下爆撃と機銃掃射を行う。泉山船長は報告により適切な操船（突込んでくる方角に船首または船尾を向ける）避航をするが、雨のように降り注ぐ機銃弾は避けようがない。土囊に突き刺さるカン高い音の十三ミリ機銃弾はそれほどでもないが、四十ミリ機関砲弾の衝撃はさまざま、ドッキドッキと体に響き、船橋樓の薄鉄板を紙のように右舷から左舷に突き抜き、土囊に当たれば二重列が横にズレてくる。こうした騒乱、轟音の中で船橋後部のバンカーハッチの底から、機関部員がどなるように唄う軍歌が切れぎれに聞こえてきたのが印象的で、悲壮なものであった。彼等は戦況もあまり知らされず、突如として死が訪れる職場にあり、全速力一杯のいまはただボイラーに送る燃料炭の運搬を寸時も緩められなく。

約一時間の第一次空襲が止み、静かになった。護衛艦、タンカー、大型船が主として攻撃されたが、中型船の本船とて目標より除外されることはなく、敵は物量や戦闘力に十二分の余裕があった。

しかし、船長の適切な操船により、本船の損害は軽微であった。主操舵機などには異常がなく、操舵機の周囲も防御されていたため、操舵も敏速にでき、直撃弾は一発も受けずにすんだ。人的損害では重傷二名を

出したものの、土囊の効果はすばらしいものであった。ただ機銃掃射の集中を受けた船橋は、窓ガラス全部が飛散し、目も当てられぬ惨状であった。船団は被弾して猛煙に包まれたり、擱坐炎上や轟沈などで隊列は乱れていた。旗艦香椎は依然として船団の先頭に立ち本船はその近くに位置してその庇護を受けるように行動した。

約十数分後。飛行時間十分ぐらいの海域に敵空母群がいるのである。第二次の空襲が始まった。わが方は死力を尽くして防戦に努めた。あまり戦果が上がらず、それに反し低速船や被弾で落伍し後方に取り残された僚船は、猫がねずみをなぶるようにな隻また一隻と集中攻撃を受けて姿を消して行った。本船の貧弱な火炮（八センチ砲一門と十三ミリ機銃二丁）は一矢でもむくいんと、矢継ぎ早に急降下してくる敵機に銃弾を注ぐ。機銃の銃身は焼け海軍警戒隊員のみでは手が足らず、乗組員が弾薬の補給充填や銃身の冷却水運びなどに協力する。われわれは職責のためある程度こわさが紛れるが、任務のない者は銃弾に追われ右往左往し、船首倉庫から弾薬箱を運搬するよう命ぜられたが、機銃掃射でハッチコーミングの蔭で身動きもできない状況であった。敵機の乱舞約一時間。潮が引くように東方へ去り、そして十数分後に再び大挙しての波状攻撃が繰り返された。旗艦香椎や他の護衛艦も次々と轟沈同様に海面下に消えていった。タンカーに対して焼夷弾が投下され、爆破炎上する側を一マイル余も離れて航過したが、火炎で顔面が焼けるほどの熱気だ。救命艇、救命筏で退船する者ばかりか、泳いでいる者にまで機銃弾の雨が注がれ、殺戮の場面が随所に起きていた。残酷な光景を見て、これが戦争かと切歯扼腕したが、われわれも同じ運命を辿るのは時間の問題であった。

正午、昼食のためか敵機は上空より姿を消した。船内の被害調査の結

果は、直撃弾は一発も受けず、主機舵機いまだ健在。至近弾、機銃弾の破口より浸水。船室は形容もできない惨状で、硝煙や消火後の煙が漂っていた。負傷者の応急手当、火器の手入れ、弾薬の準備などの合い間に、交代で昼食をとる。ノドに通らぬ食事をむりやり胃袋に流し込んだ。この世の食べ納めになるやも知れず、また俗にいう腹がへっては戦ができぬ。万一の場合陸地に近いほど泳ぎ着くのが容易だというので、陸岸に接近して航海したが、それはまことに至難のわざである。不規則な変針避航の繰り返し、沿岸は目標もなく、磁気コンパスは被弾で狂っており、その上、銃弾の絶え間に行う船位の確認は、船長の勘ひとつが頼りであった。

午後一時、昼食休憩を終えて午後の作業にかかるような感じで空襲が再開された。一航士の発案で、後部甲板に発煙筒をたき、火災を装うことにした。この策は功を奏し、攻撃の手は幾分緩くなったが、限りある発煙筒では日没まで生き延びることができるか不安であった。全速力一杯十二ノット余の本船が必死に逃避しても、航空機のスピードでは瞬時にして追いつかれ、ゲームを楽しむような攻撃が次々と続けられた。僚船もまた同様で、わが船団の最後はもはや時間の問題となり、全くやり切れない気持であった。僚船の断末魔を象徴する天に宙する黒煙を南方に見る頃、敵機の攻撃により隊列の乱れた南下船団を前方に見出した。八公と俗称する八八〇トン型小型船が主で、爆弾の使用はもっていないとばかり、機銃掃射のみの攻撃で殺戮の限りが繰り広げられていた。北方海面まで敵の手が延びていることを知ったわれわれは、日没までいまだ四時間ぐらいあるが、それまでなんとか生き延びれば助かるのではないかとのほかない望みも断られた。滅入った気配が船橋内に漂ったとき、擬装火災の発煙筒も使い尽くし、比較的健在な本船の全容が暴

露してしまった。たちまち集中攻撃が本船に向けられ、必死の防戦回避も最後のあがきであった。後部甲板に爆弾が命中、大火災となり、船室後部や船尾楼への延焼、船は船尾より徐々に沈下し始めた。午後四時頃船尾が坐礁、船の動きが止まった。居住区が熱と煙に包まれ、もはや施す術もなく、これまでと決意した船長より総員退船の命令が下された。奇跡的あまり被弾していない左舷救命艇が降下され、負傷者や泳ぎに自信のない者を移し、二航士の指揮により陸地に向かった。この救命艇も陸地に着くまで、数回の機銃掃射を受け、負傷者以外は海に飛び込み艇の蔭に隠れて難を免れた。船長以下サロン職員と警戒隊長、暗号書保管の任にある私を含めた六名は、船首楼倉庫内に集まった。執拗な機銃掃射も疎らとなりやがて跡絶え、敵影も見当たらず、急速に暮れ行く夕空に潰滅した船団の炎上する火煙のみが色鮮やかに映えて、永い苦闘の一日が暮れた。

船首楼に残った六名にも退船のときが迫った。折から刻々風浪が強まり、船橋楼居住区は猛火に覆われ、船尾は海没、船首部のみを海面上にのぞかせた辰鳩丸に別れを告げ、船長を最後に次々に薄暗い海に飛び込んだ。近くに見えていた陸影は見えず、一団となって泳いでいたわれわれは、波に翻弄され何時の間にか散り散りとなって、声を掛けても応答すらなくなった。ただ暗黒の海を波と闘いながら、陸地に向けて泳いだ。

こうなると身体にしばりつけた数冊の暗号書や、双眼鏡、防水懐中電灯が重い。幾時間泳いだか脚が砂地に触れ、海岸の白波がかすんだ目に映った。助かったとの安堵感に緩む気力を引き締めながら歩一步岸を指した。ふらつく腰に力を込めるが、救命胴衣、暗号書がずっしりと重く、背後からの高波で前に叩き付けられ、次の瞬間波にさらわれて沖合

に流された。たつぷりと海水が鼻と口から押し入り体力が激しく消耗していった。ここまできてヘタバツてなるものかと氣力を振りしぼり、高波に幾度目かの挑戦をする一方、号笛を吹き鳴らし懐中電灯を照らして救助を求めた。先に救命艇などで上陸した乗組員が気付いて駆けつけてきて、両脇を抱えられて一気に運ばれ、まだ陽光の熱を保っている砂上に倒れ伏した時、「助かった」という実感がはじめて湧いてきた。翌日、水のきれいな淡水湖の側にある貧しい小部落の安南人達が、突然上陸してきた異様な服装の異邦人達に、早朝より糲を搗き炊き出しをして、一椀の御飯をもてなしてくれた。その後元氣な若者をもって捜索隊を編成し、何度も海岸線を捜した結果、溺死者二名を收容したが、四、五名の行方不明者は荒天で絶望視された。

死者の埋葬や捜索で二日間を過ごした後、陸軍の救援隊と連絡が取れ、一月十六日救援の貨車でサイゴンに向かった。列車は北方より漸次南下して、次々と遭難船員を收容したが、火傷者が多く、その中で辰嶋丸の人員被害は十名ぐらいと少ない方であった。サイゴン郊外の遭難船員收容所に隔離收容された推定四百余名の船員は、潰滅した船団にあって幸運な生存者であった。しかし、その大部分の者は、二十年四月初め、阿波丸に便乗し、日本に帰還中台湾海峡で撃沈され、全員帰らぬ人となった。辰嶋丸乗組員中四十名も不自由な收容所生活から解放され、航海の安全を国際条約で保障された緑十字の阿波丸で日本に帰られる喜びに包まれて、三月三日サイゴンを後に、陸路昭南港へと長い汽車の旅に出発した。途中、私と山田操舵手（佐藤金治甲板長）は食中毒に罹り、野戦病院入りとなり、阿波丸には乗船できなかった。そのため台湾海峡での遭難を免れることになった。辰嶋丸乗組員が無事日本に帰還できたのは終戦の翌年四月下旬で船長、一航、三航と村上三機の職員四名

と部員若干名であった。なおサイゴンにて終戦間際に現地召集された数名の若手部員の話は不明であるが、無事復員したとしても乗組員六十名余のうちわずか十数名に過ぎなかった。

辰嶋丸が戦闘の最中散っていった人、被爆して陸岸に逃れる際高波に呑まれた人、また阿波丸に便乗して帰国の途についた人々。皆、いま一度日本本土の土を踏みたいと願って果たせなかった人々のことを思うとき、運命とはいえ、戦争という命の尊厳を否定した時代に生まれ合わせ、た者の悲哀を感じ、心から冥福を祈る次第である。